

造形教育が求める新たな創造

—世界的難課題解決に迫る造形学習の実践を通して—

New Creation on the Art Education
— An Art Study to Cope With the Difficult Situations in the World —

お茶の水女子大学附属小学校 古市 憲一

はじめに

○ 美的感性の陶冶を主眼としていく造形学習

本論は小学校教科「図画工作科」の目標・内容に焦点を絞って論述する。

21世紀にあと4年強、平成7年4月第15期中央教育審議会発足、同審議会への文部省諮問も行われ、新しい教育課程編成に向けて大きな波動が起き小学校教育の在り方、その教科構成も含めて総括的な見直しを迫られている時、小学校図画工作科の目標・内容について新しい視点に立って検討すべきであることは言うまでもない。

現行学習指導要領の目標・内容及び現行各教科書の内容から導き出されてくる学習の主題としての「表したいことを現わす」「つくりたいものをつくる」さらには「花・人物・風景・生活の部分等を絵にかく」「伝える、飾る、役に立つもの等を作る」「造形作品の鑑賞」といったこれまでの学習内容に終始してよいのかどうか、その根本から再検討をしていく必要があると思う。

「描き、つくり、楽しみ、使い、鑑賞する」という極めて個人的なレベル、即ち児童一人ひとりの美的情操の陶冶にかかわる内容を中心にした目標・内容に限定してよいのかどうか、根本から見直すことが必要であろう。

これまで図画工作科が児童個々の内面の充実、情操の涵養に焦点を当てた目標を立てその内容を構成してきたこと自体には誤りはない。どのような時代が到来しようと児童一人ひとりの精神性の高揚、美的感性の陶冶が目標から削除されることはあり得ない。

○ 社会の変化に主体的に対応していく教育

しかし一方、ここ半世紀科学技術の進歩をばねとした社会全体のめざましい進展を考えれば、造形美術教育がひとり、その進展から無縁な位置に立ち続けることは許されまい。第一次産業の主力である農業においても米作り、野菜作りの手法は大きく変わり、植付けから収穫迄のあらゆる段階に自動化された大型機械がはいりこみ、以前にみられたのびやかでのどかな耕作風景の殆どはその姿を消した。全国各地にみられるファミリースタイルのスーパーマーケットにおいてもバーコードによって価格計算と金銭の収受が自動化されソロバンとか筆算を演用している店舗は殆どない。山深い里においても「自家用自動車」は活用され、電話やTVによって多くの情報を収受していることをみても、社会全体の変革はおしとどめようもなく進展している。

こうした社会生活の変化，生産や消費の構造や手法の変化がみられる中であって，義務教育としての「小学校の教育」がそこから無縁な存在であり得る筈はない。個性化，情報化，科学技術の進展，国際化といった言葉が初等教育の場でさかんに活用されそれを目標として掲げた教育実践研究が全国各地でなされていることを見てもそれは明らかである。

○ 造形学習に求められる新たなる視点

「図画工作科」の教育の目標・内容についても，「純粹美術としての絵画・彫刻・デザイン・工作」だけにこだわり「描き，つくり楽しみ，使い，鑑賞する」ことが教科の主内容であるという姿勢だけでは，こうした社会の進展に対応できないばかりか前衛として社会をよりよい方向に導くパイオニアとしての先導的立場には立ち得まい。「図画工作科」といえども，おしとどめる必要のない良い方向への変化であるならば，そうした社会の変化に積極的に対応しそれをよりプラスの方向，地球上に生存する全ての生命体にとってより至福の方向への変化に貢献すべくその目標・内容を変革していく必要があると考える。

変革が社会に害を与え人類共存の理念に反するものであったり憎悪と争乱を呼びこむような内容であれば断固行うことを拒絶してよいが，社会のよりよき進展に寄与し平和と人類愛に貢献する変革であるならば，これまでの内容のみに固執することなく新しい展開として内容に加えていく勇気が望まれる。

1. 新たなる視点

従来図画工作科の主内容である「描く，つくる，役立て楽しみ鑑賞する」の他にどのような内容を付加すれば，社会の変化に対応するだけでなくよりよい方向に進めるための先導的役割を果し得る教科像をもつことができるのであろうか。

児童はもとよりその両親を含めて家庭や社会の人々に「なるほど，これはいい学習をしているな。これこそ時代が求めている学習だ。どしどし子どもに学ばせてほしい。」と思っただけの学習を展開することができれば，この教科に対する社会的評価は一変する。

「自然環境保護」の問題は解決困難な世界的な課題として人々の前に立ちふさがっている。過度な開発は気象条件にまで影響を及ぼす程の環境破壊を起こし，人々の生活に大きな危険と不安をもたらしている。「自然環境の保護」は人類が解決すべき緊急かつ重要な命題となってきている。これを解決の方向に導くために教育が果たす役割りは大きい。文部省はじめ各教育機関，更には民間各種教育団体がそれぞれの立場から「環境教育資料」を作成し小・中学校に参考資料として提示していることからみても小・中学校の教育実践に大きく期待されていることが伺える。

〔美術教育学第7号1985.10（美術科教育学会編）〕の中で「美術教育と環境」なる立論を掲げ，環境教育と造形教育のかかわりの重要性を指摘した上越教育大の阿部靖子氏はさらに同じ「美術教育学第16号1995.3」に『自然環境とかかわる環境造形教育について—20世紀後半以降の美術の動向から—』なる立論を載せその中で次のように述べている。

『環境問題が人類共通のテーマとしてあげられる現在，自然の中に人間のあり方を問い直し，

よりよいかかわりを求めていく環境造形学習は、これからの美術教育の中でも重要な視点になると考える。いかに自然を再生させ、その中で調和した生活文化を築いていくことができるのか、そのような提案は美術教育の絵画、彫刻、建築、造園といった領域の再統合を意味し、美術教育の内容の総合化と拡大をさえ必要とするものでこれからの課題であろう。』

そして氏は同論の中で美術教育で扱う環境問題の内容として

1. 自然を守るための学習
2. 文明の危機に対する学習
3. 都市・生活型環境問題に関する学習

をあげている。

世界的規模で人類がかかえる難課題は「環境保護」の他にも「エネルギー問題」「老人福祉の問題」「人口問題」「食糧問題」など数多い。そのいずれも小・中学校の教育の中で取り上げそれが解決に向けての基礎的な理解に加えて、行動をおこし力を尽くす有為ある青年を育成するための前段階の教育を可能な限り行う必要がある。こうした教育に貢献できる学習内容をもった教科は社会全体から大きな評価を受け初等教育の場で重要な位置を占めることになる。

小学校教科「図画工作科」もこうした位置を占めるにふさわしい教育内容をもちよりよい社会を築くため、人類愛に燃え世界的視野に立って活動する青年を育てるために貢献する教科になることができれば児童はもとより両親を含めた社会全体からより高い評価を受け、教科としての存在感は一段と高揚する。

さらに阿部氏は同論の中で『開発の名のもとに自然が破壊されていることや世界的にはどんどん森林がなくなってきたことも確かである。人が自然とうまくかかわれなくなった時、文明も滅びるであろう。次の世代を担う豊かな感受性をもった子どもらに自然の大切さを伝えていくことが環境教育の重要なねらいであり、美術教育でも同様である。』と述べこれからの造形美術教育の教科像を望見している。

筆者はそうした教科像を想定し、既に小学校5年、中学校1・2年を対象にいくつかの実験授業を試行してきた。その具体的内容については次章で詳述するが、小学校では発達段階に即して1学年から6学年迄それぞれにふさわしい題材を組み指導方法に工夫さえ加えれば「環境問題」が「学習」として十分に成立するとの確信を得た。

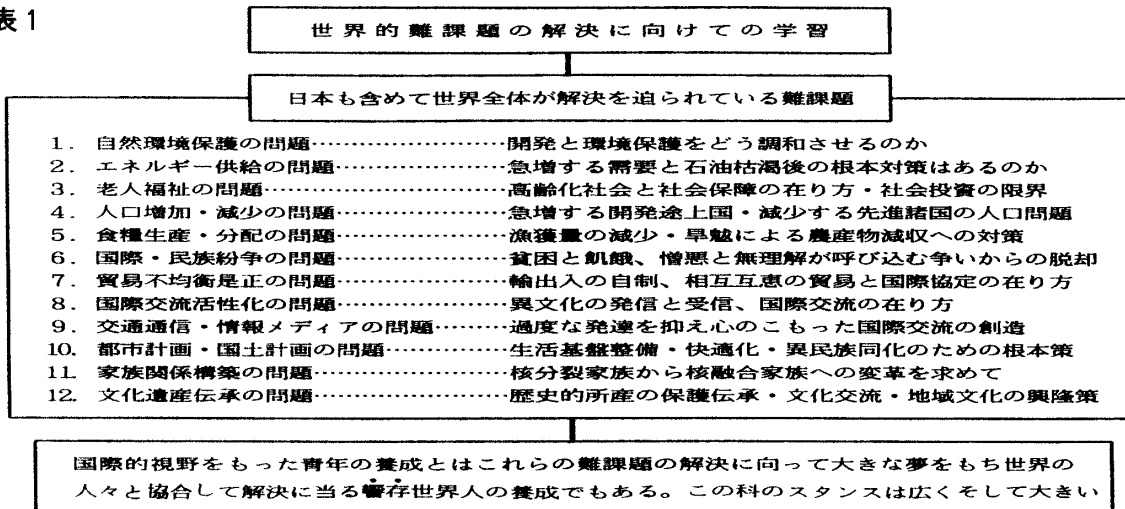
環境問題とは異なるが老人福祉問題の一例をあげてみたい。

敬老の日の前後に「おじいさん、おばあさんに楽しいプレゼントを作って贈ろう」（小・1学年）という題材を設定し、児童一人ひとりの発想を十二分に活かした造形品をつくり、老人クラブを訪問して手渡すとか家庭に実在する祖父母に贈るなどの造形学習は、地域を問わずこの小学校の一年生でも十分に可能な「老人福祉の問題」に直接該当する学習である。世界的難課題の解決に向けての学習をこの教科でとり上げることに抵抗感をもつ前に教科として何ができるかを考え意欲的に取り組む態度を教師自身をもつことが重要である。

2. 造形学習にとり入れるべき新しい題材案

日本も含めて世界全体が解決を迫られている難課題は多い。その内の代表的なものを挙げれば表1の如くである。いずれも発達段階に即した工夫と配慮を加えれば「図画工作科」の学習として十分に展開可能な内容であると考えられる。

表1



こうした新しい題材を入れた「学習指導計画」を立案するに際し、現行学習指導要領が指示する内容との相関性を考慮しつつ、児童に過度な負担がかからぬよう立案していくことが重要である。「内容の精選」が叫ばれている現今、新しい内容を加えるのであるからこの点はよほど真剣にそして慎重に立案する必要がある。21世紀なる新しい時代を視野に入れそれにふさわしい内容に組みかえていくことこそ精選であり、そのためにはより重要な内容とそうでない内容とを入れ替えていく作業を行う必要がある。「内容の精選」の真の意味はそこにある。

例を挙げれば表2に示しているように、3年11月頃の題材「身近なところを絵にかく」では学校の周辺に出かけて村や町の一部を絵に描く学習をする。その際、「どんな村にし、どんな町にしたら楽しくなるだろうか。好きな森や林、草原や池、建物や遊び場などを考えて自由に描き変えてみよう。」と呼びかけてみる。

子ども達は自分たちの身近かにある町や村をもっと楽しくするために子どもらしい夢をプランとして自由自在に描き込む。こうして「町村計画についての夢制作（ドリームプラン）」の学習が成立する。環境改善を子どもらしい夢として生活の中に意味づけていくことができる。これこそ社会科の絵地図学習とは全く異なる「造形」らしい学習となる。

表2

第3学年	造形活動 (身辺材他)	飾るものをつくる 家族関係構築についてのドリームプラン	伝え合うものをつくる 自然環境保護についての夢制作	身近な所を絵にかく 都市計画町村計画についての夢制作	造形品を鑑賞する
	造形活動 (身辺材他)	野・山・川・海などを絵に書く 自然環境保護へのドリームプラン	見ながら立体に表す 老人福祉についてのドリームプラン	伝え合うものをつくる 交通通信問題についてのドリームプラン	
第4学年					

3. 世界がかかえる難課題解決に向けての造形学習の実践について

(1) 〔実践例Ⅰ〕 題材「オゾン層の破壊をこれ以上すすめてよいのか」 小学校 第5学年

指導 平成6年5月 指導者 古市憲一

題材観

① フロンによるオゾン層破壊は今や現実の問題となった。南極大陸上空に大きなオゾンホールが発見されたのである。精密機械の洗滌、メッキ塗装の工程、電気冷蔵庫、クーラー、それにスプレーなどに多用されてきたフロンが大気圏に大量に放出されたことからそれは起った。

② 地上2万メートルから4万メートルに分布する成層圏の中間に巾約1万メートルにわたって地球をすっぽりと覆っているオゾン層。それは太陽から降りそそぐ有害な紫外線を殆ど吸収しつくし太陽光線が無害にして地球にとどけてくれている。まさにオゾン層は人類だけでなく、地球上のあらゆる生物にとってかけがえのない天然の防護服なのである。今その防護服に穴をあけポロポロにしようとしている。私たちを守っている防護服を私たち自身が傷つけ破壊しようとしているとは何というおろかしさなのか。

③ オゾンは植物がつくる酸素を原料とし太陽の紫外線によってつくられる。フロンは紫外線に会うと強い酸化塩素に変わりそれがオゾンを際限なく分解していく、今すぐにでもフロンの放出をやめなくては、やがてオゾンホールは地球上空いたる所にでき有害な紫外線が地球上に降りそそぐことになる。人類だけでなく地球上の生物は絶滅の淵に追いやられよう。そうなるからでは遅い。今すぐオゾンホールの存在を人々に知らせフロンの使用と放出をやめさせなくては、その強い想いを直載に5年生にぶつけ真剣に考えさせたいと願ってこの題材を設定した。

学習の目標

- ・オゾンホールの状況を知り原因であるフロンの姿、オゾン層破壊の様子を想定し絵にかく。
- ・自然環境保護への強い意識をもち将来そのために自ら行動を起こすことに思いをはせる。

学習活動の展開

① 学習課題の提示・第1段階

『オゾンは植物のつくる酸素と太陽光線によってつくられる。それは地球上の生物にとってかけがえのない防護服であること。その命の恩人ともいえるオゾン層を何と守ってもらっている人間が破壊しているとは一体どうしたことか。その原因がフロンガスであること。生活にとって如何にそれが必要であろうとも人類そして地球の生物が絶滅したのではとりかえしがつかない。

まずはオゾン層のこと、フロンがなぜ有害物質に変わるのかよく調べてみよう。』と提示。

児童の反応は強くそして深かった。なぜどうしてそのようなことになったのか、一体誰がそのようなことを、自分自身もそれに加担していたとはという感慨が教室中に溢れた。

「これではだめだ。何とかしなくては」というつぶやきがあちこちから洩れた。オゾン層形成、フロンガスが有害物質に変わる仕組みなどの教師の説明をかたずをのんで聞き入った。

② 学習課題の提示・第2段階

『とにかくフロンの恐ろしさを今すぐにできるだけ多くの人々に知らせなくては。そしてフロンの使用をただちにやめるよう呼びかけよう。しかしフロンは目には見えない気体。姿かたちを

みた人がいない。それを目に見える形にして人々に知らせよう。空想でよい。フロンの姿かたちオゾン層を破壊している様子をとにかく形に表してその恐ろしさを人々に知らせよう。』

児童の反応は速かった。画用紙を手にするやいなや早速思い思い鉛筆・カラーペンを走らせた。

「先生、ポスターのようにかかなくてもいいの?」『ポスターではない。多くの人にオゾン層の存在とそれを破壊しているのが何と人間自身のつくったフロンであることをみんなに知らせるSOS。緊急発信。つまり絵入りの電報といったものかな。』

「好きなようにかいていいの?」『いつもいっているように造形は前例やルール、枠にしばられない学習。自分の決断で全てを決定できる学習。夢想から発想そして構想と自らの責任で全てを進めていこう。』と力説していった。

(2) 〔実践例Ⅱ〕 題材「トラック街道に変身した夜の高速道・宅配便を考える」 小学校第5学年
指導 平成6年10月 指導者 古市憲一

題材観

① 「宅配便」、個人荷物の戸口から戸口への配送体系は生活物資を含めてあらゆる小口貨物の搬送にとって便利この上ない輸送システムであるため一般大衆の圧倒的支持を得て小口貨物輸送は事業として急成長している。今やどの街角でも宅配便業務を行う小型トラックをみかけない日はない。

しかしその背後では東名高速道を始め日本の主要な高速道路と主要国道は貨物輸送の大型トラックで溢れかえり交通の大渋滞と共に排気ガス公害の一大発生地帯と化してしまった。昼夜をわかつたため大量の排気ガスの発生は深刻な大気汚染を引きおこし酸性雨となって地表を襲い森林を枯渇させていく。

② 生活の便利さの過度な追求が生活の基盤を破壊させるという矛盾。生活の利便性を失なわないうで自然環境を守るという両者のバランスをどのようにとるのか。どのようにすれば地球環境を守りながら生活の利便性を保持発展させ得るのか。「破綻から発展への構図」をどう描くのかを5年生の児童と共に真剣に考えてみたい。

③ エネルギー効率からみて極めて不利な長距離小量分割輸送いわゆるトラック便輸送を減少させ省エネルギー・省資源を実現しながら大量小口輸送を可能にする方法はないのか、現実の輸送体系を直視しながら自然環境を守ることと生活の利便性の両者を止揚する方法を何としても構想したいと考えてこの題材を設定した。

児童の奇想天外な発想・夢想ともいえる柔らかな発想をもとにビッグプロジェクトとしてのドリームプランを自由に策定させてみて果してどのようなドリームデザインが生まれるのか大いに期待して学習を進めてみたい。

学習の目標

- ・生活の利便性を保ちながら自然環境も守る方法を考え出す。
- ・トラック輸送の効率を革命的に高める方法を夢想し具体案を考え出す。

学習活動の展開

① 教師から問題提示と児童の反応

「トラック輸送（宅配便体系）を保持しながら大気汚染を防ぐ方法を何としても考えて欲しい」と板書とことばで児童に強く呼びかけた。

それに対して児童から次のような意見が出るなど活発な反応があった。

- ・電気自動車の開発を急ぎトラックのエンジンも電動にしたらよい。
- ・排気ガスを出す重油の使用をやめ別の燃料を使うべきである。
- ・大気の中に排気ガスを放出しないで消滅させる方法を考えたらよい。
- ・太陽熱利用のソーラーカーの開発を急ぎトラックにも応用すべきだ。

『電気自動車については既に実現しているが一回当りの充電走行距離が70km程度、登坂能力も出力も極めて低く長距離大量輸送には全く不適であること』を説明。

『クリーンな燃料については開発中、排気ガスを消滅させる方法は現実には車輛価格の面から無理、ソーラーカーは一人一人を乗せて走るカーレース等が実施され次世代交通機関として注目されてはいるが太陽光発電に限界があり今すぐ排ガス公害絶滅の切り札にはならないこと』などを話した。しかしこうした児童の素直で直載な考えの良さを誉め「夢想すること」の素晴らしさ、破天荒な発想から時代が動くこともあり得ることを話し大いに賞揚した。

② 第二段階の学習課題提示

『JR新幹線車輛の写真を見せ現時点でのJRの基本方針は新幹線をより高速化することによって航空各社に乗客を奪われないようにすること。そのためには次世代新幹線車輛を開発し時速300キロ運転を早期に実現することにあること、大量貨物の高速輸送については全く考慮されていないこと』を話し、5年生に『大量貨物高速輸送新幹線の総合システムについて立案企画し大渋滞を日常的に惹起している高速幹線道路の苦難を救うこと、そして大気汚染にピリオドを打ち環境保護を推進していくこと、そのためには国家予算の大半を活用してよいから抜本的なドリームプラン、超ビッグプロジェクトを打ち出して欲しい。』と力説。

上記のように力説督励。JRが現在実施している貨物輸送の実状を写真資料で紹介。大量急速輸送にはトラックごと運ぶ全く新しいタイプの新幹線車輛を開発することが最重要であることと、車輛だけではなく駅・ホーム、改札口なども貨物専用の新構想システムを発想立案することがポイントであることを説明した。

児童はここで大きく強い反応を見せたちまち次のようなつぶやきがきかれた。

- ・ホームを坂にしてそのまま道につなぐ。
- ・新幹線車輛にスロープをつける。
- ・ホーム全体をベルトコンベアー式にする。
- ・トラック専用のエレベーターをつける。
- ・3分以内に発車できるようにトラックの出し入れを工夫する。

各自ドリームプランの制作に入る。

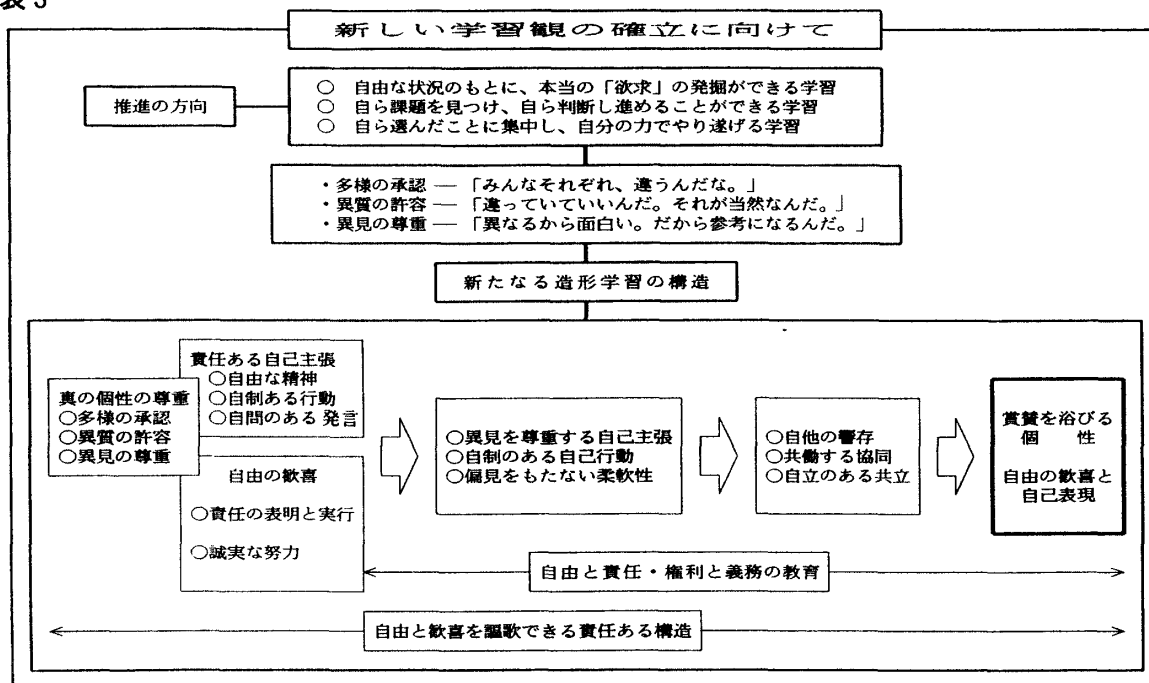
4. 新しい学習観の確立

(1) 新たなる造形学習の構造

前述した如く、「図画工作科」が新しい内容を加えて学習をすすめていくためには、乗り越えなければならないいくつかの視点がある。

その第一点は「学習観の変革」である。同一題材、同一材料、同一技法そして同一作品ができるといった教師主導の画一的な学習指導観ではなく、「多様の承認、異質の許容、異見の尊重」をメインにすえた児童主導の自立促進型の学習観に変えていく必要がある。児童の純な心と夢想力を萌芽させたいと願うなら児童に「責任ある自己主張」の重要性を常に説きながら、他との異なりに萎縮しないよう児童一人ひとりが真に「自由の歓喜を謳歌できる学習」を成立させていくことが重要である。

表 3



このような学習観のもとに表3のような造形学習が常時実現されれば、自由の主張と共に級友の自由を承認するという「自由な精神の共有・響存の関係」が自然に生まれ、相互に助け合うことが日常化し学級全体に「自立のある共立」の精神が漲り造形学習に爽やかな風を呼びこむことができよう。

(2) 小学校の教師像を創造する

学習観の変革は「造形学習」の具体的な展開にも大きな変革を迫ることになる。教師の顔色をうかがいながら制作をすすめる児童は消え、一つ一つ教師の指示を待ちその通りに制作する児童の姿も消える。

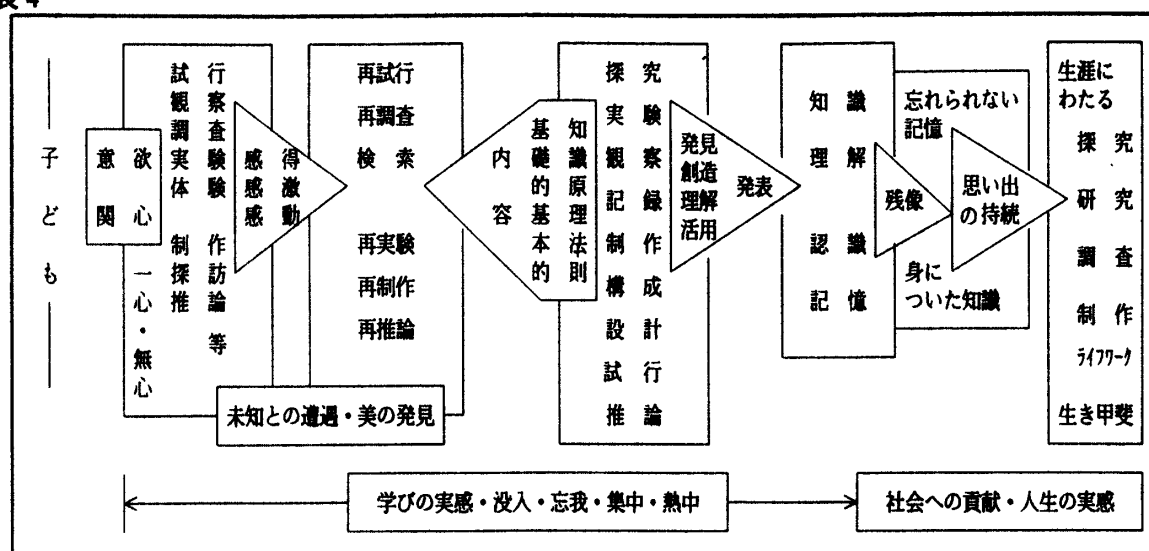
子どもの意欲・関心から学習がスタートする以上、教師側にはそうした意欲・関心を児童にもたせ得るような状況をはっきりと設定する必要が生まれる。児童にとって興味の強い魅力的なテー

マを常にさがし求める努力が教師側に課せられる。それにはよりよい時代を築くための鋭い先見性、理想を求めてひたむきに考え抜く誠実さ、前例や常識にとらわれない柔軟な精神などが基本的に要求されてくる。「時代感覚を鋭く把えた造形学習を推し進める夢とロマンにあふれた教師像」が21世紀の造形を進める教師像そのものなのではないだろうか。

(3) 生涯学習の基礎を培う造形学習

前述した如く、児童の意欲・関心からスタートする造形学習では、表4に示したように児童に「試行」「実験」そして「推論」や「調査」「探訪」「観察」に関する行動の自由を認めることが必要条件となる。そして「再調査」「再試行」「再実験」という再三にわたる挑戦の自由を与えることが重要となる。「何度でも挑戦できる」ことこそが「未知との遭遇」を呼びこみ「新しい美の発見」を具現し大いなる「創造」につながる。

表4



子どもの自発性を大きく尊重する「新しい学習観」による造形学習の実践の中で、人類文化の結晶とも言える「造形の原理」を背骨にもつ基礎知識や基礎技術（技法）をどのように児童に伝授していくのか、大きな課題となっている。児童一人ひとりが制作の中で直面する困難や障害を乗り越えていくためにも教師は常に手の内に、種々な資料や用具、技術や技法を用意しておく必要がある。それらを個別又はグループ、時には一斉指導によって教示することも児童にとっては重要な探究・試行・実験・理解・活用の対象であることを考え児童に感動と感激をもって受け入れられるようにタイムリーに示すことが重要である。

児童の「意欲・関心」を大きく尊重する学習のすすめ方と「基礎・基本」の指導の深化は決して矛盾しないと考えている。

そうした学習経験は必然として「知識・理解」を堆積させることになると共に「忘れられない経験」としていつまでも身につきやがては生涯にわたって探究・制作を進めたいとの意欲にもつながろう。「生涯にわたって学習したい」とする生涯学習の基礎が培われていくのである。

5. 「自由と責任の重要性」を体得させ得る教科の特性

21世紀を展望した新しい課題についてその実践例を挙げながら「造形教育」がこれから小学校教育の場で果すべき使命について論述してきた。しかしそうした使命を果していくには、そのための場と時が必要であることは言及するまでもない。残念ながら現行の小学校教育課程の編成においてのこの教科に対する年間授業時数の配当は著しく少ない。「週時間数僅かに2時間」という教科として存立するには最低最小の時間しか配当されていない。

全ての場面で自らの決断による制作が可能である造形学習では「自由の歓喜」を謳歌できると共に目に見える形として作品を完成させねばならないという責任が重くのしかかる学習でもある。「自らの決断には自ら責任をとる」といった人間生活にとって最高最大の紳士協定を学びとらせることができるすばらしい教科である。

以下その意義をのべて終論としたい。

心にうかべるかげろうの如き、とりとめもないみずみずしい夢想、さまざまな考えを自由自在に出していく発想の大胆さなど、夢想する自由、発想する自由を児童に謳歌させるには、そのどれもが承認され、許容されるという、その児童個人が属する集団（学級・グループ）に、相互に助け合う暖かい雰囲気が必要となってくる。「どんな考えを出しても、どのように表しても笑われない。」という確かで強い精神的な保障があってこそ内気で弱気な児童も一心不乱になって集中し自分の想いを色や形にして表し得る。

真に自由な自己決断の中には「試行錯誤する自由」が含まれる。出直し作りなおすための再挑戦の自由であり、修復し再構築する自由のことでもある。

こうした「自由」が十分に保障されてこそ造形の歓びは生まれる。こうした歓び、心の底からわきおこる歓喜こそが、あらゆる困難をも乗り越えて形あるものに仕上げようとする意欲を生む。

立ち足かかる多くの挫折を越えて制作を完成させたいという意欲こそが、責任を果す大きな原動力になり得る。

「自由の歓喜」と表裏一体となるこの「責任の重さ」を自覚させ、自らの発想を形あるものに仕上げることの厳しさを実感させうるとしたらその学習は大きな価値をもつ。

造形学習は「自由に制作できるから楽しい」と考え「想いの自由、決断の自由」を付与してもそれを実行していく「責任の重さ」を自覚させなければ、その自由は単なる「思いつき」から出た「わがまま」に終ろう。他人の気持ちや公共の福祉を考えない「わがまま勝手な青少年」の存在を数多くみる現今の社会にあって「真の自由とは何か」「自由に付随する責任の重大性」を実感しそれを体験させうる学習が存在するとなればその学習自体大きな教育上の意義をもつ。

「自由と責任」の素晴らしさと重さを一体として実感させ得る学習が「図工・美術の学習」であることに今一度おもいを致し、造形教育が求める新たなる創造のパラダイムと共にその教科が求める新たなる力点として強調していきたいものと考えている。

参考・引用文献

(引用)

1. 論文 阿部靖子「自然環境とかかわる環境造形教育について—20世紀後半以降の美術の動向から—」
『美術教育学』第16号, 1995年, 8頁。

(参考)

1. 論文 石川 毅「総合教科「芸術」の可能性について」『美術教育学』第16号, 1995年。
2. 小学校指導書, 図画工作編, 文部省, 1989年。
3. 小学校学習指導要領, 全編, 文部省, 1989年。
4. 中学校美術指導資料, 美術科における指導計画の作成, 文部省, 1982年。
5. 小学校図画工作指導資料, 構想段階の指導, 文部省, 1976年。
6. 東山 明編『美術教育研究ノート』1982年。
7. 広島大学附属小学校編『教育課程』1978年。
8. 日本造形の会研究紀要第3集「今, なぜ造形なのか」日本造形の会編, 1990年。
同上 特別集録・カリキュラムの創造をめざして—アイズナー理論の研究—
54~77頁 (Elliot.W.Eisner の DBAE理論)。